

鳳凰堂内部拝観

堂内での撮影や、堂内に向けての撮影は禁止です。

堂内の扉や柱に触れたり、持たれたり、梁に座ったりしないようご注意ください。また、かばん等が当たらないようご注意下さい。

竹の結界（目印）より先には立ち入らないで下さい。

鳳凰堂内部

詳細情報

【平等院】

平等院は、今から967年前（2019年現在）、永承7年、西暦1052年に、時の関白太政大臣藤原頼通によって父道長から譲り受けた別荘をお寺に改めたのがはじまりです。この年は仏教がすたれる末法の世のはじまりとされていたので、極楽へ行けるようお願いを込めて造られました。

【鳳凰堂】

今、皆様にお入りいただいているこのお堂は、その翌年、天喜元年に、極楽の教主、阿弥陀如来を安置する「阿弥陀堂」として建てられました。正面から見るこのお堂の姿が、ちょうど翼を広げた鳥のように見え、さらに屋根の上に2羽の鳳凰が据えられていることから、江戸時代の初め頃より「鳳凰堂」と呼ばれるようになりました。

【本尊】

こちらが本尊の丈六阿弥陀如来像です。木彫、すべてヒノキで造られています。これほど大きな仏像を造れる1本の木はなかなかありませんので、寄木造りという技法がとられています。光背・天蓋も木組みを行っています。つなぎ目には釘・鋸を打って麻布を貼り、その上に漆を塗って金箔を押しているのです。外から見てもつなぎ合わせたようには見えません。この本尊を造ったのが、平安時代最高の仏師と謳われた定朝です。定朝は寄木造りを完成させた人物として有名で、まるみを帯びた柔らかな表現は、のちのちまで仏像造りのモデルとされました。その技法・表現を今に伝える唯一の仏像がこちらの本尊で、他には定朝作と断定できる仏像がありません。

【雲中】

次に、長押の上の白壁にかかっております小さな仏像は、すべて雲の上に乗っております

ので、「雲中供養菩薩像」と名付けられています。楽器を演奏したり、舞いを舞ったり、浄土を飛翔しながら阿弥陀如来を讃えています。全部で52体ありますが、オリジナルの半分・26体は取り外し、ミュージアム鳳翔館の中で間近に見られるようになっています。堂内にある半数は、オリジナルの代役として懸けられた模刻像です。

【扉絵】

堂内の扉・壁をご覧ください。九品来迎図くほんらいこうずと呼ばれ、阿弥陀如来が菩薩たちを従えて、亡くなる人をお迎えに来ている絵が描かれております。壁の絵は色が薄れてわかりにくくなっていますが、扉絵は1970年頃に実際の扉絵を復元模写したものと取り替えております。当時の絵の内容・色合いがおわかりいただけたと思います。

【鳳凰堂修理】

最後になりますが、この度平等院で行いました鳳凰堂の修理にふれたと思います。鳳凰堂は前回の昭和修理から56年を経て、瓦の傷み、外部塗装の剥落が進み、木部の劣化が著しくなっていました。そこで、平成24年から3年をかけて、瓦の全面的な葺き直し、外部塗装の塗り直しを行いました。今回の修理では、様々な調査研究をもとに、平安時代に最も近い姿に復元されました。瓦は平安時代に使われた平等院オリジナルの文様を復刻し、塗装は「丹土にっち」とよばれる伝統的な顔料で塗り直しています。これに合わせ、屋根上の鳳凰、飾り金具等もすべて金色に復元しました。池の対岸から眺める姿は、まさに極楽浄土の宮殿そのものです。